



日本及び日本人

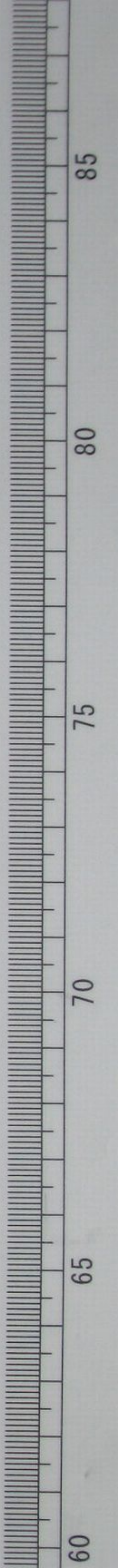
大正五年十月十五日号

檀畫だんがわに非ず檀畫だんがわなり

漆小天童

自百一頁
五頁三頁
立国会図書館

酒井好古堂の發行雜誌『浮世繪』第拾六號掲
 載、山中嵐光氏の「檀畫に就いて」の一章を讀ん
 て、僕の考と餘りに懸隔して居るので、他人の説
 を辯駁するやうで、洵に心にいさぎよしとしない事だが
 、檀畫に就いて質詞があつた~~と~~とあるから、は
 廣い世間にはこんな分りさつた事を、どうのやう
 のとやがま~~し~~く言つて居るのか、さうならば僕
 の考、石思込~~ん~~で居る事を考考まうてに述べ
 て、一ツ惡むま~~れ~~者(間違つたら笑はれ者)になら
 うかと思ふ。僕のは實は考へたものか、何んこ
 か、そんなやがま~~し~~いものではない、僕は卒直に
 單に見た儘を初めから檀畫と讀んで、それが先



入主となつて、檀畫などいはいはれりと、むしろ異様に感ずるのである。

山中氏は、雪坑齋に就いては『難波丸綱目』を引いて云ふ所せられて居るが、實は『難波丸綱目』の畧は『後寶曆四年の繪本武者兵林』にも、同年の『繪本玉濃池』にも、明和元年の『繪本草錦』にも、同二年の『繪本續摺草』にも、檀畫と手へんに書いてある。今僕の手元にある『繪本玉濃池』を見るに、檀畫浪華と處士北尾雪坑齋辰宣、又『繪本草錦』には、檀畫浪花雪坑齋北尾辰宣と署してある。『難波丸綱目』に檀畫とあらは、それは筆耕者の誤りなからう。

国立国会図書館

又重政に就ては、博物館所蔵の渡船の圖と、
 書籍にては、『孔子一世大聖畫傳』を引いて居ら
 ざるが、なるほど重政には往々檀畫云云と署名
 名したものがたゞいではない、第一彼の有名なる京傳
 の『四季交加』には、檀畫北尾紅翠平齋と
 署名して居る。又天明六年版の『繪本八十
 宇治川』寛政三年版の『繪本福壽草』
 いづれも檀畫とあると見え、僕の繪本目録に
 ちさう出て居るが、併しそれは木ハシの檀が、あ
 まりて、キハシにして檀畫とあるべきである。今
 又手元にある『歴代武將通鑑』を見るに、
 矢張檀畫東都叡殿良蹊樵父北尾紅翠
 齋圖とキハシに檀と書いてある。其他明和五年
 版の『繪本本草』鹽草』及び『ガバみ草』、天明

国立国会図書館

元年の『俳諧名知折』、いづれも檀書画とあつた
と見え、これ又僕の繪本目録には手ハソに書
いてある。しかし何本にかうあるアあると、
數の多少なんぞといつたところ、畢竟孟子
に所謂五十歩、百歩の水懸論で、それは
どうでもよいとして、唯爰に論ずべきは檀
畫であるが檀畫であるかの論である。檀畫
とあつたから、檀畫は喬木科に屬して、和名
マユミ、云々など、明外漢の僕などには齒も立
たぬ専門の植物学などを引合に出されては、重
政は東都叡嶽良蹊樵父と署して居るから
、多分上野の山に入つては木樵りして居つたであ
らうなど、正直に請取らぬはならぬが、叡嶽
良蹊とあるから、今更の上野根岸あたり

(5)

住居して居つたらう位に、ガツト考へて見る論
 法によると、彩色摺の繪本だけに、檀畫
 とあれば、或はマユミ、説もさうなづかれたる説
 かも知れないうが、どうも此の論は右祖祖
 出かけるより外はなほ、又支那の檀郎説、これ
 も僕が往年支那に遊んでも見たが、僅に
 半ヶ年、天津と北京に居つただけで、あるからし
 て遺骸ながら遂に、檀郎、檀郎畫など
 という、詞は耳に入らなかつた。このマユミ説
 を持出す位ならば、可浮世繪記者はなせ、丹
 鉛總録に所載の明楊慎論畫家檀名しを
 持おさなかつたらう。丹鉛總録に御所藏
 であけられ、可佩文齋畫譜卷十四に載せ
 あり、御覽なさい、これ又御所藏であけ

れば、敵に糧食を齎すやうなも
流の句讀點を附して其の一章を掲げて
見ゆよ。

畫家七十二色、有檀色、淡精所合、
古詩所謂、檀色畫荔枝紅也、而婦世
暈眉色似之、唐人詩詞多用之、試舉
其略、徐凝宮中曲云、檀粧惟約
數條霞、花間詞云、背人勻檀注、
又銅昏檀粉淚縱橫、又詩月留檀印
齒痕香、又斜分八字淺檀蛾是也、
又云卓世曉春、曲農美小檀霞、則言
酒色似檀色、伊孟昌黃蜀葵詩、檀
點佳人噴異香、杜衍雨中荷花詩、
檀粉不勻香汗濕、則又指花似檀也。

国立国会図書館

右の如く『浮世繪』記者の味方にとつて有益な、鬼
 に田檀畫といふ孰語が、支那には古くから
 存存している。しかるに僕はこゝな孰語位は、
 味方にとつて楠の泣男ほどにも思はないから、
 かつその向ふにまはして置いて、僕の所謂檀画
 に就ていはんに、檀画とはほほしいままたな畫
 という意である。即ち法に依らぬ我儘勝手
 な畫といふ意である。なせそんな事を畫いた
 かといふと、當時様によつて胡世畫を畫し狩
 野の末派でも、家柄とあつて、世間から真の畫
 家とやうに認められ居るに對して、浮世繪師
 の雪坑齋や畫政は自ら謙遜して畫法
 7
 ても河にも知らぬ檀恣心なる畫工といふ意を以
 て着したるのである。それが不思議に雪坑齋

といひ、重政といひ、北尾姓の者はわり、
 と肉筆は此の限りにあらず、署して居るの
 珍らしきが、雪坑齋のはじめてやつたのを、
 重政が門人といふわけでもなからうが、鬼に
 角真似て見たのであらう、それが重政
 自身が、不注意に或は木ハシに書いたかも
 知れぬ、又筆耕者などに誤まらぬたかま知
 れぬ。鬼に用擅画であるといふ事は、山中
 姓に山尾光を號とするやうな、与丸の利の良
 い頭腦を持て居らるる方ならは、真の氣の
 附くべき事がある。それは外でもない、重政と
 同年輩で、而も仲好の勝の川春章が
 縦画生と署して居る事である。即ち、
 寛政元年の可三十六歌仙、同二年の可繪本

国立国会図書館

接穂の花には、江都縦畫生旭朗井勝西雨
 春草と署名してある。この縦畫生も矢張りほ
 しいままたる畫生という意で、其の出處はこ
 ゝであるかというに、重政と春草は技術の
 上では『美人會』の合作がある位に、互に中
 るし合つてきた仲であるが、重政の擅畫と
 署するのを見て、己も一ツそれを真似て同字
 では面白くないから、何と變つたほしいままと
 讀む字を見付けようとして、丁度天明三年頃に
 出来た皆川淇園の『虛字解』のホシイママ
 の部を見よと、初めに放の字があり、次に擅
 の字があり、其の次に縦の字があったから、此の
 縦の字がよからうと、縦畫生と直ぐ用ゐた
 のである。山中山風光君以て如何とす。此の

説が何の本に出て居るなど、野暮な質問は
 すべきからず。そんな事は、**佩文齋書畫譜**
 』に於て出て居る筈が無し、又**皆川淇園**の『
虚字解説』も請合未ぬが、**春田章**が重
 政に**擅畫**の説明を聞いて**縦畫**生じたるは
 確である。僕は不透明の箱中の物を透視
 する事は不可能であるが、嘗て**經**來つた世
 の事は皆わかるので、さういふ**重政**の
 の對話を透聴した。透聴といふ執話は
 無いが先廿。(大正五年九月三日稿)

国立国会図書館

